

戦姫絶唱シンフォギア GB

ちばばばん♪

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

魔法少女事変から数ヶ月。様々なアーティストが参加する天羽奏追悼ライブが何らかの組織に襲撃され、3つの聖遺物が強奪される。時を同じくして暗躍する第4のガングニールの少女。何のために傷つき、そして戦うのか。今、新たな戦いが幕を開ける。

目次

第1話	再会の鼓動	1
第2話	ガングニール、二たび	8
第3話	ガングニールの少女達	16
第4話	Edge Works	22
第5話	胸に力と無力とを	29
第6話	装者達の黄昏	36
第7話	夢の途上	52
第8話	撃槍	61
第9話	撃ちてし止まぬ奇跡のもとに	67
第10話	君でいられなくなるキミに	73

第1話	シンフォギア	80
第12話	GB	88
第13話	わたしの進む道	94

第1話 再会の鼓動

「貴女の夢を見るよ ずっと…ずっと…傍にいてくれて ありがとう」

風鳴翼は歌い始める。4年前の悲劇によって亡くした片翼を想いながら。

「貴女の温もりを抱いて 先へと進むよ」

今、あの惨劇のライブ会場で、天羽奏追悼ライブが始まる。

「この温もりを次は私が 私が伝播させる 翼に乗せて」

奏…私は…生きて、生きて、生ききるよ…仲間と、皆と一緒に…!

ライブ会場のVIPルームに立花響・雪音クリス・月読調・暁切歌はいた。

「すごいデス！悲しい歌だけど、元気になろうって思えて…とにかくすごいデス！」

「これが…トツプアーティスト…」

一曲目を聞き終えた切歌と調は興奮と感嘆を隠せずにいる。

本来ならそこにもう一人混ざりそうなものであるが、響の顔は暗い。

「らしくねーぞ」

クリスが問いかける。理由は分かる、分かるからこそ口を開いた。

このライブは天羽奏の追悼だけが目的ではない。

先輩は：被害にあった皆が先に進めるように：笑顔になれるように、歌っているのだから。

それに、森岡の叔母の入院で来られなくなった小日向未来の分も自分が、という思いもある。

「昔ここで色々あったから：私はここで、奏さんからガングニールを受け継いで：」

4年前、この会場で翼と奏のユニット、ツヴァイウイングのライブが行われていた。

その会場で発生した特異災害、人のみを炭素と変えるノイズの襲撃に響は巻き込まれた。

死の危機に瀕した響をノイズから守るために奏は命を燃やし、今ここに響は生きていく。

「今でも思うんだ：もし私がいなかったら、奏さんは今でも生きていたんだろうなつて」
「あの事件は！全部ファイネが悪いんだ：お前が気にすることねえんだ：」

ライブの裏で自衛隊によって行われた「Project:N」、完全聖遺物ネフシユタンの起動実験。

その成果物を奪うために、先史文明期の巫女ファイネによってノイズが放たれた。それがライブの惨劇の真実である。

「それでも…」

「皆、久しいな！」

突然VIPルームの入り口が開かれた。

「翼さん！」「先輩！」「うおー！トップアーティストデス！」「切ちゃん！」

そこには先ほど一曲目を終え、次のアーティストにバトンを繋いだ翼の姿があった。

「次の出番まで時間があるから、ここで皆と見るのも悪くないかなと思つてね。」

今日のチャリテイライブには多くのアーティストが来てくれた。

今歌ってるのは「ヒンメル・アンド・ヘル」だな。

トラックライブで人気急上昇中のバンドらしい」

心ここに非ずだった響はステージに目をやる。

そこには天使の羽のようにフサフサとした長い髪を二つに結つた長身の少女と、毛先

のはねた短い髪の目つきの悪い少女がロックアレンジの『ORBITAL BEAT』

を熱唱していた。

「すごい…！」

「天国と地獄…、その名の通り、優しく包み込む歌声と荒々しくて力強い歌声だな」

「でもその歌声が上手く調和してる！」

「まあ私と調には叶わないデース！」

先ほどまでの暗い雰囲気は消え、皆歌に聞き入った。響の顔からは笑みがこぼれた。

「…さて、私はそろそろ戻るとしよう」

「え、翼さんもう行っちゃうんですか?」

「今頃マリアが寂しがっているかもしれないからな」

響を気にかけて見て来た翼であったが、一先ず安心して皆に背を向ける。

(頑張つてね、剣ちゃん)

ふいに翼の耳に、あまりいい意味ではなく聞きなれた声が聞こえた気がした。

だが振り返るも、そこには手を振る4人がいるだけだった。

聞き間違えかな? そう思い、翼はVIPルームを後にした。

「待たせたなマリア」

ステージ裏に戻った翼はマリアと合流を果たした。

「もう、遅いわ。そこばく心配したんだから」

「ふふ、そこばく、ね」

翼に合わせようと古語を使うマリアを愛おしく思いながら、翼はステージに向かう。

「もうすぐ私たちの出番ね。ねえ翼、天羽奏とはこんな時、どんなことを言っていたの?」

「両翼揃ったツヴァイウィングなら何処までも遠くへ飛んで行ける……」
 懐かしみながら翼は口にする。それが奏のライブ前の最後の言葉だ。

「どんなもので、超えてみせる!」

続く言葉はマリアが発した。マリアは本能的に感じたのだろう。

奏……見ていて……私と新しい相棒のステージを……

「空を舞う灰色の雪 ヒラリ」「ヒララ」「ヒララリラ」

「掻き集めて達磨を作れど」「そこに心はもうない」

『Grau Snow』……奏が作詞した、奏曰く自身の成長の歌だという。

「私は一人、独り残された」「あの温もりに触れることはもうない」

「深い悲しみの焔で」「激しい怒りの焔で」「全てを焼き尽くす」

「でも世界は貴女を独りにはしない」「周りを見れば、そう新たな出会いが」

「守りたい」「守りたい」「全てを包み込む」

ノイズにより家族を失ったからこそ書けた歌、家族を失ったことのない翼一人で背負うのは重たいが、マリアと二人ならばこの歌をまた歌えると、皆を励ますこの歌を歌えると、そう思った。

「空を舞う桜の吹雪 ヒラリ」「ヒララ」「ヒララリラ」

「土に還り」「次の命へ」「繋ぐよ温もりを」

そして歌い終わる。レーザービームに照らされて。多くの観客の完成に包まれて。

二人は顔を見合わせ、そして観客に大きく手を振る。

その時突如、ステージに何か投げ込まれた。

それは爆発し、そして、ステージ上は煙に包まれた。

同刻。ライブ会場屋上に、彼女はいた。

「ついにこの時が来たわ……」

一人しかいない彼女は、スナイパーライフルを構える。

毛先のはねた短い髪その少女は、スコープ越しに鋭い目でステージ上の煙幕を見つめる。

彼女は地羽伴、ヒンメル・アンド・ヘルのツインボーカルの1人であり、バンドでの名前はB。

煙幕の中に何かが入る。

「やりなさい、K！」

刹那、ステージ上に竜巻が発生する。

煙幕が切れた先には、目を閉じ口を押え咽ぶ翼とマリア、そしてガスマスクをした数名の少女と、ガングニールを纏った少女Kがいた。

伴はガスマスクの少女のうち、手に聖遺物のペンダントを持つ少女に照準をあてる。計画通り……。伴はほくそ笑み、引き金を引いた。

だがその弾丸は、目標に当たることではなく……射線に割って入った翼の胸に飲まれた……。

第2話 ガングニール、二たび

VIPルームにいた響達は、煙に覆われたステージを見て、これが演出でないと直感で悟った。

「翼さんっ!!」

響が勢いよくVIPルームのドアへ向かう。

だがその時、突然ドアが爆発し、中に煙が…ステージと同じものが充満する。

「危ないわよ、拳ちゃん?」

吹き飛んできたドアは突如現れた古風なドレスを身に纏った女性、否オートスコアラーによつて両断される。

「げほっ、お前は…フアラか!」

少量の煙を吸い込んだクリスが呻く。

「今日は味方よ? 新しいマスターの命令ですもの。ウフフ」

異変に気付いた襲撃者達はマシンガンを乱射しながら室内に突撃してきた。フアラは手にした剣で銃弾をすべて弾く。だがその場に足止めされてしまう。その隙に襲撃者は煙に咽ぶ調と切歌に接近し、そしてナイフをかざし、胸元のペンダントを刈り奪う。

「任務完了」

そう言い残し、襲撃者達は銃撃で牽制しながら撤退していくのであった。

変身できれば…装者封じのための煙にまかれながら、そう思う響であった。

「さっきの…似てる…。あの声は…」

「でも、そんなのおかしいデス！だって、だって！死んだはずデス！」

突然の銃声、崩れ落ちる翼、動揺したように見える見知らぬ装者、そしてガスマスクの少女達。

目を開けたマリアは周りを見渡し、そして状況が理解できない。

「これは一体、…翼?!」

煙が吹き飛んだステージで、マリアは翼の元に駆け寄る。

「マリア…彼女は無事か…?」

か弱い声で、胸から血を流す翼がマリアに問いかける。煙で目も見えぬ中、翼は殺気に反応し、襲撃者を庇うために射線に割り込んだのであった。

「馬鹿っ!!」

その時、見知らぬ装者が手にした槍をペンダントの少女に向ける。

「すまない翼…」

その装者はマリアがかすかに聞き取れる程度の小声でそう呟き、ペンダントの少女に

突進した。

だがそこに、遠方から鋸と鎌が飛来する。これはシウルシャガナとイガリマの…？
胸元からペンダントを奪われたマリアは安堵するが、遅れて登場した装者の顔は調と切歌ではなく…。

「……………セレ、ナ？」

そこに現れたのは、かつてマリア達を守り、そして亡くなったセレナの姿をした少女達だった。そしてペンダントの少女もまた聖詠を唱え、露わになった顔はセレナそのものであった。

どうして？ どうしてセレナがここにいるの!? 3人も…いえ、もしかしたら残るガスマスクの少女達も…？

混乱するマリアの元に、さらにもう1人、装者が現れるのであった。

「3対2、分はこちらが悪そうね。K、いけるわね？」

ステージ上に現れた、ガングニールを纏ったBⅡ地羽伴は、相棒のKに問いかける。

「ああー！」

2人のガングニールの少女と、イガリマ・シウルシャガナ・アガートラームを纏う3人のセレナ。

一触即発の空気のに、さらに上空から乱入者が現れる。

「マリアさん!! 翼さんっ!?!」

「先輩!! どいつだ、てめーがやりやがったのか!?!」

ギアを纏う響とクリスが到着した。クリスは伴の持つライフルを見て、伴に弓を向ける。

その一瞬に、3人のセレナとガスマスクの少女達は撤退する。

「ちっ、作戦失敗よ。K、引くわよ」

伴もまた背を向ける。だがKは響を見つめ、じっと動かない。そして、少し笑った。

「良かった…またな」

外へ向かう2人に向けてクリスが弓を穿とうとした瞬間、響が間に割って入った。

「待って、クリスちゃん!今の、奏さん!奏さんだよ!!」

「…なんだと!?!」

見つめ合った瞬間、Kが天羽奏であると理解した。死んだはずだけど、生きていた。良く分からないけど、響は見送りながら嬉しく思った。

「翼さんは意識は相変わらず戻りませんが、肉体的には峠を越えました。間もなくこの潜水艦に移譲予定です」

事件から数日後。響達が所属するS・O・N・G.の潜水艦の司令室で、緒川慎次が

説明する。

フロンティア事変で一度、そして魔法少女事変でもう一度潜水艦が破壊されたため、これが三隻目である。

響・クリス・マリア・調・切歌そして未来は安堵の表情を浮かべるが、緒川は説明を加える。

「ただ、胸に受けた銃弾の破片が心臓部分に複雑に食い込んでいるため手術でも摘出不可能でした。しかもそれは、ただの銃弾ではなく聖遺物：ガングニールだったようです」

「昔の私と一緒…」

緒川は頷きながら、さらに別の説明を始める。

「ガスマスクの襲撃者達ですが、残された髪のDNAを鑑定したところ、マリアさんと一致しました」

「やっぱりあれは、セレナなのデスか？」

「でもセレナはもういないはず…：それにあんなにいっぱい…」

「クローン…：なのかもしれないわね」

「そんな！何のためデスか!？」

マリアは首を横に振る。だが自分と調・切歌のギアだけが狙われた理由は何となくわ

かった。

フィーネの魂の抛り所の候補として選ばれた、つまり全員遺伝的に繋がりがあから、ギアを纏える可能性があつたということなのかもしれない。

「それから、ヒンメル・アンド・ヘルのツインボーカルのBとKですが、そのことはこちらの方からお話が聞けるそうです」

緒川はそう言つて、何もない空間を向く。いな、そこには透明化したフアラがいた。

「彼女達は何者なのか、目的はなんなのか、そしてなぜ貴女が再び我々の元に現れたのか」

「ウフフ。まずマスターのBですが、私と出会つた時には既に GANG ニールの装者であり、東洋錬金術の陰陽術の使い手でしたわ」

「本名は地羽伴、かつてリディアンの子供でしたが、ある日突然友人と共に行方不明になりました」

「マスターの絶唱特性は「死」。Kちゃんはマスターが絶唱を介したエインヘリヤルで現世に呼び戻した過去の戦士よ」

「つまりあれは天羽奏さん本人で間違いありませんね」

「目的は教えられていないわ。あの場に私が使わされたのは、私が透明化できるから。私への命令は、第一に襲撃者から鋸ちゃん達の命を守ること。第二に襲撃者に GANG

ニールの弾丸を植え込むこと。ウフフ、これで満足かしら」

「動力源は、以前と同じく他者の記憶ですか？」

「いいえ、フォニックゲインよ。マスターが目的に合わせて構造を少し弄ったみたい」

「なるほど、ありがとうございます」

緒川とフアラの会話から、あの場にいた2グループのうちの片方の姿がおぼろげながら浮かんできた。

「逆に私から聞くけど、これからどうするの？ 急務は剣ちゃんのことかしら？」

フアラが楽しそうに聞き返す。

胸のガングニールを取り除かねば、かつての響のようにガングニールに体が浸食されてしまうかもしれない。

「それなんですけど、私から提案があります！」

思わぬところから声が上がった。声の主は小日向未来、響の友人であり、かつて神獣鏡のギアを纏い響を救った。

「皆神山に行きませんか？ あそこなら、もしかしたらまだ、…未発掘の神獣鏡が残っているかもしれない！」

かつて皆神山で行われた聖遺物の発掘。だがノイズの襲撃により、発掘チームは壊滅し、中止となった。その際、フィーネによって皆神山の聖遺物・神獣鏡は持ち去られた

が、それが全てとは限らない。幸いにして神獣鏡は、かつて大量生産されたという文献が残されている。

「私なら、LINKERを使えば、見つけられるかもしれません！」

第3話 ガングニールの少女達

「ふんふんふん、晴天デウス、ピクニックデウス♪」

響・クリス・マリア・調・切歌・未来・緒川・ファラの一行は、長野県皆神山に到着した。

「じー、切ちゃん…」

「たく、呑気なもんだな、全く。ちよつとは緊張感持ててんだ」

「まあまあクリスちゃん。未来のサンドイッチ、美味しいよ。考えたらお腹空いてきちゃった」

「もう、響ったら」

「私もささやかながら皆様の分のお弁当とお茶を作ってまいりましたわ」

「ファラさんってそういうこともできるんですね。えへへ、楽しみだな」

非常に和気藹藹とした雰囲気ではあるが、むろん目的はピクニックではない。

皆神山、かつて聖遺物神獣鏡を出土した遺跡を再調査し、未発掘の神獣鏡の回収が目的である。

「先輩も、一緒に来れたらな…」

「そういえば、伴さんと奏さんは来るんですか？」

「マスターは私を介して状況は把握しているでしょうけど、来るかどうかは分かりませんわ」

「そそそそれって、スパイじゃないデスか!!」

「切ちゃん、…気づくの遅い」

「まあまあ皆。こうやって一緒に行動することが、伴さんと分かり合う一歩になるかもしれないんだから」

響はフアラにライブ会場で救われたことや、奏の交わした一言から、伴達が敵ではないと感じていた。

もう一つの、マリアの妹のクローン達は良く分からないけど、彼女達とも分かり合いたいとも。

話しながら進んでいるうちに、いつしか一向は遺跡の入口にたどり着いた。

「未来、大丈夫？」

「ありがとう響。私は大丈夫だよ。LINKER、打って？」

未来はむりくりではあったが、かつて一度神獣鏡と適合した。

幼い頃の翼は、そしてセレナのクローン達は、高い適合率をもって聖遺物のもとに導かれた。

未来はLINKER、人と聖遺物を繋ぐための制御葉をもって、神獣鏡を探すというのが今回の計画である。

響は未来の首元にLINKERを押し当て、そして投与した。

少しの間を置いて、未来は言葉を発した。

「…かすかに、感じる。何かと呼んでる、この中にきつと神獣鏡がある！」

未来は顔を輝かせ、一行を見渡す。

これで翼さんの胸のガングニールを消し去ることができると。

そして未来は気づく、一行の後ろから突如エアキャリアが現れ、二つの人影が飛び降りるのを。

「Verias kamitamisu trun」

「Zerios kamitamisu trun」

空から降ってきたのはセレナのクローンであった。

「セレナ2、シウルシヤガナとの適合、良好。任務開始ですわ」

「セレナ3、イガリマとの適合、良好です。任務開始します」

鋸と鎌が響達に向けられる。

響とクリスは即座に聖詠を唱え、戦闘態勢を整える。

「未来は中へ！」

「お前らも安全な…」

二人はそれぞれ避難を促すべく、言葉を発した。

だが未来とファアラ、緒川が遺跡内に突入した瞬間、更なる乱入者が現れる。

別方向からの竜巻が遺跡の入り口を吹き飛ばし、空から降ってきた物体がセレナ達と響達の間に壁を作る。

「なんだ!?…剣!？」

「槍だっ!!」

巨大な物体の上から聞こえた声には聞き覚えがあった。それは潜水艦で眠っているはずの…。

「翼さん!?それに奏さんと伴さんも!!」

そこにはガングニールを纏った三人の少女、天羽奏と地羽伴、そして風鳴翼の姿があった。

「よう、またあったな。悪いがあたし達の相手、してもらおうぞ」

「こうして交わるのは久しいな、立花、雪音。いざ参る」

「そつちは任せたわよ、手駒ども。セレナシリーズ、今日こそ殺すわ」

奏・翼が響・クリスに向けて槍を向け、伴はセレナ達へ向かって駆けていく。

「そんな、どうして?」

「操られてるのか!?先輩と戦うなんて…」

戸惑う響とクリス、だからその二人の肩にマリアが手をかける。

「歌と歌をぶつけ合えばわかる。立花響、あれを使う!」

「そんな、あれはまだ未完成どころか一度も…。それを実践でいきなりなんて」

「雪音クリス、こっちは任せてあっちへ…きつと私はセレナの顔をした彼女達とは戦えない…」

「分かった、任せろ」

クリスは伴を追いかける。奏がクリスに槍を向けるが、そこで動きをとめた。

新たな聖詠、ギアを持たないはずのマリアの聖詠が聞こえたからである。

響と手を繋いだマリアは聖詠を唱え、そして黒いガングニールを身に纏った。

「これが…他者と手を繋ぎ合う特性の立花響だからこそなせる奇跡…」

ライブ会場での事件で四名もの戦力を失ったS・O・N・Gは、この有事に戦力補充のために、一つのギアを二人で纏うという手法を考え出した。

もつとも、フアラが潜水艦に同乗していたため、一度も練習はなされていなかったのだが、マリアは無事に変身した。

「歌いましょう、マリアさん!」

手を繋いだ響は、マリアを見つめながら力強く発した。

「この出会いは偶然なの？」 「それとも瞞しか？」

「この出会いは奇跡さ」 「再び奏で始まる」

「歩む方法も道も違う」 「それでも終着点は同じさ」

「この戦いに意味があるなら」 「私達は歌おう」

「「「 We are gunnir 「「「

響とマリアの歌に呼応するように奏と翼は歌い、そしてぶつかる。

響は確信した、彼女達は彼女達の意志で今戦っている。

ならば私は、それに応えるために歌いたいと。

目的は分からないけれど、この二人なら、必要な時に話してくれるのだと。

第4話 Edge Works

奏・翼に響・クリスの足止めを任せた伴は、一直線にセレナ2・3の落下点を目指した。

「今日こそあんたらにぶつといのをお見舞いしてやるわ」

開口一番、伴は槍からビームを放つ。

「2対1で勝てるだなんて」

「舐められたものですよわ」

左右に散開して交わしつつ、セレナ2は無数の鋸を投擲する。

視界を埋め尽くすほどの鋸を、伴は身を捻り、槍でいなし、躲しながらセレナ2へ進む。中距離攻撃が得意なシウルシャガナは、距離を詰めれば一気に落とせるという判断だ。

だがそうはさせせじと、上空からセレナ3が襲いかかる。肩部から無数のアンカーを発射し、伴の退路を断ち、手にした鎌を振りかざす。

伴は槍で重い一撃を受け止めしのぐが、さらに地面が盛り上がり、地中から鋸が飛び出す。

「これが私達のコンビネーション」

「誰にも負けませんわ」

だが鋸は遠くから飛来した何かに弾かれ、伴に直撃することはなかった。

「苦戦してるようだな。先輩を撃つたことは許してねーが、今日のところは協力してやる」

ライフルを抱えたクリスがホバー走行しながら接近してきた。

だがセレナ達と距離を取った伴は、クリスめがけてビームを放つ。

「うっさいわね、邪魔すんならアンタもぶちのめすわよ」

クリスはプロテクターを展開してビームを逸らす。

「デメー何しやがる!」

「邪魔だから邪魔つつつてんのよ! 何度も何度も、人の計画を台無しにしてんじやないわよ!」

「ひい、二人とも怖いデス」

「ヤンキー先輩と、ヤンキー歌手…」

遅れながらやってきた調と切歌が2人のやり取りに率直な感想を述べる。

「おい、何で来た! 安全な場所にいろって言ったろ!」

「ちよūdいいわ、アンタはプロテクター貼ってその二人のおもりでもしてなさい」

「はあ？素直に手伝われろ！」

「余計なお世話よ！」

再び伴はクリスに向かって発砲した。先ほどより強めに。

「あの…そろそろ戦闘を再開していいかな？」

その様子を眺めていたセレナ達は鋸と鎌を構える。

「私達の歌をお聞きなさい！」

「作る・繋ぐ・植える・流す、operation開始 ちぐはぐな私」

「切る・斬る・着る？・KILL、operation開始 あやふやな私」

クローンならではの歌を歌いながら、二人は再び連撃を開始する。

鎌が振り下ろされ、躲した先に鋸が迫る。遠くに気を回すと、今度は至近からワイヤーが襲いかかる。地上・空中・地中・近距離・遠距離、あらゆる場所からの攻撃が伴を追い詰める。

それでも伴は、一人で戦い続ける。

時折クリスに向かって遠距離攻撃を行うことで、手出しはさせない。

(そろそろ弱い演技はおしまいかしら)

伴はセレナ達の任務を把握していた。あるいは誘導したと言っても過言ではない。

ライブ会場で3つのペンダントが奪われ、3つのペンダントが残ったのは偶然ではな

い。

セレナ達は、シンフォギアの軍事利用を目論むある国によって作り出された。世界に数例しかいない装者を量産し、安定供給するために。ただし、生産したクローン装者が生粋の装者に劣っていてはならない。

そのために半分だけが強奪され、そして今日、性能実験のためにこの場にセレナ達は現れたのである。ファアラ・伴によって、皆神山に遠回しに誘導される形で。

片や伴の最終目的は、セレナ達の組織の壊滅である。

そのためにはいずれかのセレナをガングニールで侵し、エインヘリヤルとして使役し、情報を得る必要があった。

伴が勝ってしまったてはせっかく侵しても処分されてしまうかもしれない。だからこそ力を抑えて戦っているのである。一人での戦いにこだわるのも、自然な負けを演出するためだ。

もちろん、二度も利用したクリス達装者に死なれたら寝覚めが悪いというのもあるが。少なくとも今回の実験が成功と認識されれば、もう装者達に危害が加えられることはないだろう。

…だというのに、絶望的な言葉が聞こえてきた。

「私達の歌で…」

「不協和音を起こすのデス!!」

調と切歌は、無策でクリスの後を追ってきたわけではなかった。

気づかれないように潜入美人操作感眼鏡をかけ戦場に現れた真意は、シウルシャガナとイガリマの元の持ち主として責任を取るため。

敵がLINKERを使っているのならば、薬切れのタイミングで聖詠を口にする事でギアを取り戻す。そうでなければ敵の歌に自分達の歌をかけあわせ、ギアを混乱させ出力を落とす。

それが彼女達のできることで、責任の取り方だと思った。

もちろん二人だけでは危ないが、頼れる先輩が守ってくれる、その信頼が彼女達に行動させた。

『Edge Works of Goddess ZABABA』を歌わせた。

かつて風鳴翼は、あえてギアの出力を抑えるために、フォニックゲインの低い歌を口にしたという。その再現を今、調と切歌は実行した。

ギアとの絆が完全に断ち切られたわけではない、きっとギアに思いは届くと信じて、セレナ達の歌にかぶせる。

異変に気付いた伴とセレナ達から攻撃を受けるが、飛来する鋸や鎌は全てミサイルとガトリングで撃ち落とされ、ビームはリフレクターで捻じ曲げられた。

「おらおら、あたし様に遠距離攻撃で勝とうなんてあめーんだよ！」

むろん伴達は接近を試みるが、クリスは肩部に搭載した大型ミサイルを発射させずに推力とし、飛行して距離を保つ。両手で抱えられた調と切歌は歌い続け、セレナ達の動きが鈍くなったのが明らかに分かった。

(これなら勝てる！)

そうクリスは確信したが、次の瞬間、空から飛来した何かがミサイルを貫き、クリス達は地面に向かう。腰部にミサイルを発生させ、その噴射で何とか不時着した。

「何なんだ、今のは？」

空を見上げると、そこには先ほどのエアキャリアと、アガートラームを纏ったセレナがいた。

「セレナ2、セレナ3、実験は終了です。下がって。エクストライブ・アガートラーム、良好。セレナ1、実験開始！」

エアキャリアにセレナ2、セレナ3が戻るのを眺めながら、伴は戦慄した。

「雪音クリス、二人を連れてすぐに離脱しなさい。守りながら戦えるほど優しい相手じゃないわ」

ただならぬ気配を察したクリスは、調と切歌を抱え即座に皆神山の方へと後退していった。

「必ず戻るから、それまで持ちこたえろ！」

(そういえば、オートスコアラは上手くやってくれてるかしら?)

一瞬クリス達の向かう先、遺跡の中のことを頭をよぎったが、伴は再び目の前の敵に向き直った。

絶唱を、口にしながら。

第5話 胸に力と無力とを

小日向未来は、緒川・ファアラと共に皆神山の遺跡内を進んでいた。

入口は既に破壊されたが、響達が後に迎えに来てくれると信じて、そしてその時に良い報告ができるように、未来は先へ急ぐ。

「こつちです」

未来の感知能力とファアラの風を操る力、緒川のカラクリの知識によつて、未来達は最短で最深部まで到達した。

「この先の部屋から神獣鏡を感じます！」

すると緒川は器用な手つきで未来が見つけた部屋の扉を開ける。

そこには一人、いや一つの影があつた。

「おつそーい、待ちくたびれちゃつたじゃない」

青い服を身に纏つたオートスコアラ、ガリイの姿がそこにはあつた。

「畏!？」

緒川は懐に手を伸ばし、拳銃を手に取りとうとする。だが傍にいたファアラが緒川の腕を掴んで離さない。

「これは一体どういうことなんですか?」

困惑した未来がガリイに向かって尋ねる。するとガリイは滑るように床を移動し、未来の目と鼻の先に現れた。

「マスターからのプ・レ・ゼ・ン・ト、神獣鏡のギアはタダじゃあげないってコトよ」

よくよく見るとガリイの手にはシンフォギアのギアがあった。未来はそこから神獣鏡の確かな波動を感じ取る。

「私は何をすれば…?」

「それはね、チュッ」

ガリイが突然未来の唇を奪う。

「未来さん!!」

未来の身を案じた緒川が叫び、必死にフアラの拘束を解こうとするが、それはままならない。以前のオートスコアラは口づけを通して相手の記憶を奪っていた。このままでは…。

「ウフフ、安心して下さい。あれは記憶の伝達、マスターからのメッセージを送っているだけですわ?」

「そゆこと。さ、小日向未来、一緒に行くわよ?」

長い口づけから解放された未来は、確かにメッセージを受け取ったが、それよりも重

大な事実によつて動揺していた。

「わ、私、初めてなのに…まだ響とも…」

突然未来が泣き出した。

「ちよ、ちよつと、今そんなことやつてる場合じゃないって分かつてんのか？」

ガリイの口調が荒くなるが、未来はその場に座り込んでしまふ。

「わ、私は人形よ！アンタだつて、小さい頃に人形にキスしたことぐらい、あるでしょ？」

「でも…喋つてる…」

「今時フアービーだつてリコちゃん人形だつて喋んだらうが!!」

「…うん」

ようやく未来は泣きやみ、立ち上がった。

「緒川さん、私、この人達、ううん、この人形達と一緒にいきます！」

「そんな、未来さん!？」

未来は先ほどガリイからもたらされたメッセージを脳内に反芻する。

なぜこの場所に呼ばれ、なぜこのような形で情報を伝達されたのか。そして何をすべきで、それがどう響達のためになるのか。

「私、やらなきゃならないことができたんです」

その頃、皆神山から少し外れた平野では、伴とセレナーが対峙していた。

(まさかエクストライブしてくるなんて……この場のフォニックゲインにあてられただけならいいのだけど……もしも……)

だがこれ以上は考えても仕方のないことだ。こと、絶唱を口にした伴に残された時間は少ない。

「私の絶唱特性は死……さあ英霊ども、ここに集いなさい！ エインヘリヤル！」

伴の傍に無数の甲冑が現れ、その一つ一つに何かが宿る。

エインヘリヤル、それは戦死した勇者の魂。ガングニールの持ち主であったオーディンは、何度死んでも甦るエインヘリヤルと共に戦場をかけたと言われている。それは槍自体の純粋な力ではないが、陰陽術を使える伴は槍を触媒としてその現象を再現した。

無数の甲冑がセレナーに向かって殺到する。

セレナもまた無数の銀剣を空中に出現させ、ベクトル操作の力をもって甲冑を迎撃する。

砕いても砕いても再生する甲冑は銀剣をもともせずセレナーに接近するが、突然変化が起こる。銀剣が刺さった甲冑の再生能力を、セレナーはベクトル操作の力で霧散させる。次々とエインヘリヤルが戦闘不能に陥り、無数の銀剣はあつという間に伴にせまる。

「なめんじゃねーわよ」

ここまでは伴にとつても想定内だった。

セレナーと伴の間にある甲冑が突然再生して再びセレナーに襲い掛かる。陰陽術をもって甲冑の構造を聖遺物から陰陽術世界の未知の物質に変化させ、現実世界の物理法則を超越する。

銀剣を戻すのは間に合わない。セレナーは銀鞭を発生させ、甲冑を吹き飛ばしにかかる。

だが銀剣も、銀鞭も、突然霧散する。

「この領域の物理法則を陰陽術世界の法則が塗りつぶす！」

セレナーは領域内のベクトルが計算できなくなる。

しかしセレナーは即座に自分を起点にベクトルの再計算を行う。陰陽術世界の法則を探す。

「死になさい。そして私の手駒に……」

甲冑の持つ槍がセレナーの胸元に届く……寸前で動きが止まった。

「この領域は私が制圧したわ」

ベクトルの力で陰陽術世界の領域発生の仕組み自体を捻じ曲げる。

「げほっ、げほっ、くそつたれが……」

そこで伴は力尽きた。絶唱のフィードバックと陰陽術の負荷に耐え切れずに膝をつ

き、さらに吐血してしまふ。

セレナーは手に銀剣を携え、伴の前に現れる。

「セレナー、実験終了。対シンフォギア装者戦及び対アルケミス戦における本計画の優位性を確認」

セレナーの言葉を聞きながら、ここまでか、と伴は諦めに似た感情を抱いた。

思えば皆神山で失敗だけでなく、ライブ会場でも失敗した。もつと言えば、かつて親友と遭遇した事件、あれが最初にして最大の失敗であり…。

そこまで考えて、伴は諦めてはいけない理由に至る。

そして、最後の力で言葉を発した。

「貴女達が目指す…セレナ・カデンツァ・イヴ…は…果たして人殺しができるよな…残酷な…人間なのかしら…？」

その言葉を聞いたセレナーの動きが止まる。エクストライブモードに揺らぎが発生する。

目指すべきは、より完全なセレナになること。ここで人を殺めると言う行為は、後々セレナーにとって大きな楔となり得る。

セレナーはとどめを思い止まり、姿の見えぬエアキャリアへと消えて行つた。

「私はまだ…死ねないのよ…」

こうして皆神山での激闘は幕を閉じた。

第6話 装者達の黄昏

皆神山での戦闘から二週間、響達装者5人と緒川は横浜に集まっていた。

道路を挟んで海の見える2階建てのレストラン、その2階のバルコニー席で夜風に当たりながらディナーを口にしていた。

「しっかしこんな場所に呼び出すなんて、一体どんな魂胆なんだ？」

クリスはパスタを頬張りながら疑問を口にする。

無論今日は遊びに来たわけではない。伴達と行動を共にする未来から響に一通のメールが来たのだ。

「さあ。未来からのメールには、ここのお店を予約してるからこの時間にこの6人で来てとしか」

両手にパスタを持った響が返事をする。

いなくなつた当初こそ響は落ち込んでいたが、響は未来を信じることにした。

「ちよつと、二人とも、お行儀が悪いわよー」

マリアはクリスの口元についた食べ物やナプキンで拭きながら諫める。

「マリア、…お母さんみたい」

「いいないいな、羨ましいデス。私の頬っぺたも拭いてほしいデス！」

逆に切歌までもがはしたない食べ方をして、調にチョップされる。

「痛いデス、しかしこんなところに呼び出して、どういうつもりなんデスカね？」

「ここでようやく話が元に戻る。」

「さあ、一体どういいうつもりなのかしらね」

マリアは海に目をやる。未来のことも気になるが、愛すべき親友の翼のことも気になる。

皆神山で現れたガングニールを纏った翼は確かに翼だったと確信をしていた。

しかし先の戦闘の間、翼の体はS・O・N・Gの医務室にあり、特に異常はなかったと言う。

すると、道路に一台のトラックが現れた。物品運搬用のトラックとは少し違う気がする。

停止したトラックの荷台部分が突如開き、そして、音が流れ始めた。

バルコニーから身を乗り出した響はすぐ気づく。

「この歌、翼さんの『FLIGHT FEATHERS』です！」

全員がバルコニーから身を乗り出し、トラック上のステージを見やる。

天使の羽のようにフサフサとした長い髪を二つに結った長身の少女と、毛先のはねた

短い髪の目つきの悪い少女、奏と伴。

そしてもう一人、肩までバツサリ短くした髪にパーマをかけ、一見ただけでは誰だか分からないその人物は、翼だ。

三人は圧倒的な歌唱力で『FLIGHT FEATHERS』を歌い上げ、たちまちトラックの周りに人だかりができた。

「すごい、ヒンメル・アンド・ヘルよ！」

「最近あちこちでトラックライブしてるって、ホントだったんだ」

「新しくメンバーになったTさん、かっこいいよね〜」

あたりからはそのような声が聞こえてくる。

「来たわね」

「よっしゃー、いっちょワルモノ会談といきますか」

マリアとクリスはバルコニーから飛び降りて、トラックに近づこうとするが…。

「待つてくださいい！」

後ろから聞こえたのは響の大切な親友、未来の声だった。

「そうだ、待つんだゾー。じゃないと…」

そしてオートスコアラーのミカもその後ろから現れる。慌てて未来が、「ダメだよ」とミカも諫める。

「ライブが終わったら、ここで皆さんとお話しすると、皆さんが言っていました」
改めて見る未来は、決して操られたり脅されたりしているようには見えない。

「分かった。今すぐ聞きたいことはいっぱいあるけど、翼さん、奏さんと一緒に歌えて楽しそう」

かつて奏と翼はツヴァイウイングというアーティストユニットだった。きつといっぱい歌いたいには違いない。

「お代はワタシ持ちだ、もつとゆつくり楽しんで行つてくれ」

さらに奥からもう一体、オートスコアラナーが現れる。

「さすがはトータルバランスに優れたレイアだゾ、トラックの運転もちゃんとレイアが免許を取ってやってるんだゾ」

ミカが口元に手を持っていき、おかしそうに笑う。

「ちっ、しかたねーな」

クリスは頭をかきながら席に座り、トラックライブに向き直る。

マリアは警戒の意味でミカ達の周りを見渡して、そしてその後方に何かを見つけ、誰にも気づかれず、吸い込まれるように、そこへと向かった。

「ライブ、楽しんでもらえたかしら？」

ライブが終わり、一通り観客の相手をした伴・奏・翼が、響達の元に現れる。

「どうしてあたしらをこの場所に呼んだんだ？」

真つ先にクリスが食いつく。伴は含み笑顔で答える。

「交渉よ、私達、手を組みましよう？」

「何をいまさら！あんだけぶっかけといて！」

ライブ会場で翼を撃たれ、皆神山でガングニールで撃たれたことをクリスは忘れていない。激昂する。

「待ってクリスちゃん！全て、話してくれるんですね？」

そんなクリスを響が諫める。せっかくお話しできるんだ、分かり合える機会をみすみす逃したくはない。

「それがあんた達の条件ってことでもいいのかしら？」

響は無言で頷いた。

「いいわ、全て話すわ。長くなるから、覚悟なさい？」

「私の名前は地羽伴（ちばばん）、リディアンの子供だったわ。」

私と、私の友達の、海根重（うねかさね）はね、学年トップレベルの歌唱力の持ち主だったわ。

ある日ね、私と重は、校門で怪しい男とすれ違ったの。そいつの持ってたアタッシュケースから、私達は何かを感じた。

重がね、「どうしても中身が見たい、何かに呼ばれてる気がする」って、その男に言ったのよ。

男は驚いてたわ、何せ中身は聖遺物だったんですもの。共鳴した私達は、つまりは適合者。それが二人いっぺんに現れたんだからね。

その聖遺物はガングニールの欠片よ。立花響、あんたの体から摘出された、天羽奏のガングニールの欠片」

そこで伴はいったん区切り、水を口にする。その顔は、憂いを帯びていた。

「その男は中国軍のスパイよ。軍の目的は聖遺物の軍事利用。私達は即座に誘拐され、中国にある研究施設に送られたわ。

そして重は：重はガングニールを培養するための素体として欠片を植え付けられた…。

一方の私は、培養された物質から作られたシンフォギアの起動実験の被験体にされたわ。

ギアを作る理論は、陰陽師の王（ワン）ってクソヤローが完成させてやがった。

起動さえ終われば二人で日本に帰れるって信じてた私は、進んで起動実験に参加した。そして成功させたわ。

でも待ってたのは違った現実。用済みになって処分されそうになった。そして私は

絶唱を口にして、天羽奏と出会った。

いくつかのデータを奪い、王を殺して陰陽術の力を奪い、残りはぶっ壊したわ。

でも重は：すでにどこかに連れて行かれていたわ：」

響が自分にも伴の人生を狂わせた一端があるのではないかと思い、不安になるが、偶然目があつた奏は首を横に振った。

「得た情報の中に、私の処分が決定した理由があつたわ。私はエクストライブモードになれない、凡庸な装者だったからよ。

軍が目指したのは最強のシンフォギア部隊。そのためには自力でのエクストライブは必須。

そして過去それができたのが、セレナ・カデンツアヴナ・イヴただ一人。

だから、アメリカにいた軍のスパイが入手したセレナのDNAサンプルを使って、別の施設でクローン化計画が行われていたのよ。

当初は量産した最強の装者達に、同じく量産したギアを持たせる予定だった。

だがギアの研究生産施設と責任者を私が潰したから、クローンが本当に最強の装者たり得るかを実証する術を軍は失ったわ。

だって肝心のギアがないんですもの。

そこで軍はあんたらからギアの半分を奪って、もう半分と戦わせるという作戦に出

た。

それが、軍がライブ会場での襲撃と、皆神山での襲撃を行った理由。

重への手がかりをつかみたい私にとつての、たった二回だけのチャンスだった。

クローンにガングニールをぶち込んでエインヘリヤル化すればきつと手がかりがつかめると思つたけど、結果はこのザマよ。

成果と言えば、仮死状態にあつた風鳴翼をエインヘリヤル化して手駒が増やせたつてことくらいかしら。

まあ、私が解除するか死ぬか、肉体がきれいさっぱり回復すれば、翼は元の体に戻るわよ」

自嘲気味の笑みを伴は浮かべる。その手には、いつの間にか小さなメモリーチップのようなものを持つていた。

「重への手がかりは、もうない。でもまだ、希望はあるわ。件の施設から奪つた情報をこの媒体に入れてるわ。」

これを使って、国連の立場から中国を揺さぶつてくれないかしら。

そうすれば、もしかしたら何かの動きがあるかもしれない。そこから重への手がかりが見つかるかもしれない。

私はそちらの交渉条件通り全部話したんだから、やつてくれるわよね？」

ニコリと不気味な笑みを浮かべながら、伴がチップを渡してきた。

「その交渉を、S. O. N. G. 内にいるかもしれない中国のスパイに知られずに行うために、アイツを使ったのか？」

アイツとは未来のことだ。もしそうならば、もう未来は伴達には必要ないはず。

「悪いけどまだ彼女の役目は終わってないわ。彼女には神獣鏡の装者としての役割を果たしてもらおう」

中国軍がアメリカのF. I. S. から盗んだのはセレナのDNA情報だけではない。

聖遺物の機械制御の技術もまた盗まれており、中国で数多出土した神獣鏡から作ったギアで、研究施設に「ウイザードリイステルス」を張っていた。

伴はそのギアもまた施設破壊の際に回収していた。

「潜伏するにしても奇襲するにしても、神獣鏡の力は便利だわ。」

ま、でも、未来への負荷は最小限に留めているわ。未来とミカ、二人の名前、似てるでしょ？

この親和性を用いて陰陽術で、未来のわずかな力をミカが共有し、ミカの中で増幅・発動するようにしている。

ミカはオートスコアラーの中で最大容量を誇るオートスコアラーでもあるから最適だわ。

今も実は、この近辺に神獣鏡で魔除けの結果を張っているけど、未来はギアを纏っていないのはそういうことよ」

「だから心配しないで、響」

未来が響の手をぎゅつと握る。その目はまっすぐ響を見つめる。

「私から話すことは以上よ。奏や翼とも話したいことがあれば、お好きにどうぞ」

そう言い残し、伴はバルコニーから立ち去った。

「奏さん……」

海辺に移動した響は、奏と二人きりである。

「ごめんなさい、私を助けたばかりに奏さんは……ずっと謝りたかったんです！」

4年前、件のライブ会場で響は奏に命を救われた。力を使い果たした奏は灰となり消え散った。

「……私は防人、いつか死んでいたさ。」

もしかしたらそれは翼を助けるためだったかもしれないし、違う誰かを助けるためだったかもしれない。

それがたまたまあの日だっただけ。だから、気にやまないでほしい。

それに、私は家族に先立たれたから、もしかしたらあっちに行けば会えるかも、なん

て思っている自分もいた。

生きるのを諦めるなってセリフ、ほんとは自分の為だったんだぜ。

防人の使命を忘れて、ぼっきり折れちゃわないように、ね。

こんなこと、翼に聞かれたら、今の翼になら、怒られるだろうなあ。翼だけが、ずっと心残りだった」

ふふふっと、奏は笑う。

「翼から色々と聞いたよ。新しい友達も、相棒もできた。私は嬉しい。ありがとう」

奏は響の頭を優しく撫でる。

「奏さんもこの戦いが終わったら、私達と一緒に…」

「…考えておくよ」

「先輩!!」

「久しいな、雪音!」

片やクリスは、トラックの傍で翼に話しかけていた。

「髪、切ったんすか?」

「この身は人であり、聖遺物である。髪の長さの調整なんて造作もないことだ。変装を兼ねて短くしてみたが…変だろうか?」

「に、似合ってるんじゃないか? あたしやおしゃれとかよくわかんねーけどよ」

クリスは翼に見とれ、ドギマギしてしまう。

「マリアとは上手く行ってるか？あまり話しているところを見たことがなくて、心配してるんだぞ？」

マリアはしつかり者だがどこか抜けてるからな、次いで年長の雪音が支えてやってくれ。

「そういえば、マリアはどうしたんだ？一緒に来ているものだとばかり思っていたのだから？」

「…そういえばどこに行ったんだ、アイツ」

「はじめまして、マリア、姉さん？」

レストランから少し離れた高層ビルの屋上の展望スペース、そこにマリアともう一人がいた。

「セレナ…なの？」

「私はセレナー、と呼ばれています。セレナ・カデンツァヴナ・イヴのクローンの一人です」

レストランでセレナの姿を見たマリアは思わず後を追いかけて、そして今、二人しかないこの場所で、語り合っている。

セレナーは嬉しそうだ。

「夜景ってこんなに綺麗なんですわね。風ってこんなに気持ちいいんですわね。誰かと話すってこんなにワクワクするんですわね。」

オリジナル・セレナもそうだったのかな？それともまた違った感じ方をしていたのかな？」

両手を広げ、ひらひらと舞うセレナー。その姿に敵意は感じられない。

「私達の対装者実験は成功に終わりました。だからもう、貴女と戦う理由はありません。安心してください」

「ならどうして、貴女はここに来たの？」

「姉さんとお話ししてみたかったです。それに聞きたかったです、オリジナルがどんな人だったかを」

笑顔で見つめられ、マリアはすっかり毒気を抜かれてしまった。

「それは、なぜ？」

「私は、最初のクローン个体、姉だから、妹達を守りたいんです」

セレナは物憂いげに胸のペンダントをいじる。

「後は、だからこそ、たまには甘えてみたかった、のかな」

マリアが手を伸ばせば、もしかしたらアガートラムのギアは取り返せるかもしれない

い。

でもマリアは胸元ではなく、背中に手を回し、そして優しく抱擁する。

「私達はオリジナルの肉体を完全に再現しています。しかし、誰一人として自力ではエクスドライブできませんでした。」

李將軍、この計画の主導者にして研究の第一人者は、魂の情報が違うから、と言っていました。

私達は愛国心と軍人としての知識の他に、オリジナルに近い魂の情報を知るために、様々な性格や偽りの記憶を植えつけられました。

ただ、それらは一度植えつけられると完全に消すことは難しく、きつと求める魂が作られた時、私達は不要になってしまう。処分されちゃう。

だから私は、オリジナルを知って、努力して、頑張つて、近づいて、妹達を守りたいんです！」

気づいたらセレナーは泣いていた。

「…セレナはね、優しい子だったわ。」

私とセレナ、調と切歌は、フィーネと言う先史文明期の巫女の憑代として集められたレセプターチルドレンだった。

そしてセレナはただ一人、シンフォギアの正規適合者でもあった。

セレナは苦悩していたわ。次のフィーネの器はほぼセレナで確定だったもの。

もしセレナが器になった場合、もしかしたら私と調と切歌は処分されてしまうかもしれない。

だから偶然暴走した完全聖遺物を止めると決めた時、一瞬とても嬉しそうだったわ。今ならわかる。自分が死ねば誰かが救われるって、そう思ったんだわ」

セレナを抱くマリアの手に力がこもる。

「暴走に乗じて全員で脱出するという手はなかったんですか？ベクトルの力、使いようによつては最強の剣にも盾にもなったはずです」

「セレナは、人を傷つけられるような子じゃなかったわ」

「セレナ・カデンツァヴァ・イヴは果たして人殺しができるよな人間なのかしら」か…呪いね…」

「どうしたの？」

「私達はいずれ、対軍人・対兵器戦実験を迎えます。その時、人を殺せないという制約ができてしまった私達には、破滅しかありません」

「…どうすれば、貴女達は救われるの？」

「分かりません」

「きつと、きつと何かあるはず…一万と二つ目の手立てはきつと…」

「…ありがとう、マリア姉さん」

セレナーはすつと、マリアの元から離れた。

「これを」

そう言い、セレナーはポケットから別のギアを取り出した。

「これは？」

「今日のお礼です。昔頓挫したギア増産計画の名残だと聞いています」

そう言い残し、セレナーはその場を後にした。

「自分らしく生きて…それが貴女の強さになるわ…」

第7話 夢の途上

「一」 終演の歌 終幕の鐘 風と伴に奏つ 自由の旋律 「二」

伴・奏・翼はS・O，N・G・の潜水艦に搭載されたミサイルに搭乗していた。

「二」 この大空に 翼を広げ 「三」

目的地は中国本土にある聖遺物研究施設の一つ。

「離せ」「古き夢に」「幕引きを」

伴の情報が国連に伝わるや否や、中国側はこの施設をテロリストの施設と認定。即座に派兵を開始した。

セレナのクローン達を救出するため、そして重への手がかりを探るため、伴達は行く。

同じくテロリストだからこそ、法律も、権力も、何もかもを無視して、ただひたすら一直線に。

そのために、伴達は響達との距離を置いていたのだから。

「時間よ」

伴は奏と翼に呼びかける。あるいは自分に喝を入れるための言葉かもしれない。

S・O，N・G・の潜水艦から発射され、大気圏外を飛行していたミサイルは、目標

地点を前にして降下を始める。

同時に、地上から迎撃のための弾幕が飛来する。

「うおらあああああああ！」

奏はミサイル全部の走行を蹴破り、自身の槍で嵐のような激風を新たに纏わせ、砲撃を逸らす。

「持っていて、トリプルだ！」

右側面からは伴が槍からビームを、左側面からは翼が雷を放ち、地上部隊や航空戦力を無力化していく。

歌いながら接近すること数分、遂に施設が視界に入る。

「今度こそは、成功させて見せるわ……」

その頃、施設内では、激しい攻防が行われていた。

セレナ2 || シュルシャガナとセレナ3 || イガリマは、ギアを持たないクローン達を誘導しつつ戦う。

「まさかいきなり対軍人戦闘実験になるなんて、思ってもいなかったですわ。それもこの装備、まさか……」

セレナ3は安全確認と不意打ちへの対処のために、鎌をドリルのように回転しながら直進する。

セレナ2は後方からの追っ手を凌ぐために、巨大な鋸を盾にして軍人からの銃撃を凌ぎつつ、小さな鋸を床や壁を這わせて攻撃する。

また狭い通路などでは、巨大な鋸で完全に道を塞ぎ、隔壁代わりに使う。

「こいつらは敵、敵、敵…」

セレナ達には強力な愛国心が植え込まれている。

本来であれば最も殺してはいけない相手との戦闘であるが、相手が何者かを考えないようにすることで、何とか自我を保つ。

「これが実験ならば、ギアを纏わない貴女達は戦ってはいけない。いいですこと？」

戦闘技術等も催眠学習によって習得してはいるが、ギアのないセレナ達の自我を守るため、戦闘に参加しない口実を考える。

特にセレナ2は二番目の個体、姉としての自覚もあった。

「セレナ4からの連絡、やっぱり研究員はどこにもいないみたい…装置についてた神獣鏡は壊れてるって…」

「とにかくシエルタードームへ。あそこならば簡単には侵入できないはずですわ」

急ぎながらも、外から爆発音と振動が聞こえてくるようになったことに気付く。

少なくとも現状、軍人以外による攻撃は行われてはいない。ということは、外部から何かがやってきたということになる。

(味方…？セレナー姉様かしら…？)

考えながらもシエルターに進み、そして遂に入口にたどり着く。認証キーを入力する。その時、一際大きな爆発音が鳴る。

開かれたシエルター、だがその天井は敗れ、中には三人の先客がいた。

「核シエルターって、意外と脆いんだな。たかだかシンフォギアの三撃で吹き飛ばなんて」

「何せ私は月の破片すら破壊したのだからな」

「何よそのドヤ顔は。むかつくわね」

和気藹藹とした、この場には似つかわしくない雰囲気少女達。

「…あら、久しぶりね。助けに来たわよ？」

そこにはニコリとした地羽伴をはじめとする、因縁の相手達がいた。

「…丁度いい所に来て下さいましたわね」

セレナ2は、前回の皆神山でのセレナーと伴の激戦を。エアキャリアのモニター越しで見ている。

その力は凄まじく、セレナ2・3の二人がかりで戦っていた時には、わざと手加減されてきたことに気付いた。

当時、伴が本気を出していたら到底勝てなかったし、多少の調整を受けたとは言え今

も勝てるかどうかは分からない。

だが、これは好機である。

「お前達を倒す……そして私達の有用性を示す……！」

セレナ3が鎌を構える。

もしかしたら今回の襲撃は、自分達の対軍人戦闘実験であり、自分達処分も兼ねているのかもしれないと思っていた。

少なくともセレナ1よりは実力で劣っており、そのセレナ1は現在任務でこの施設にいない。

中国で発掘されたシンフォギア、太古にフィーネが作ったそれを纏うセレナ4以下数名の装者は今ここにはいないが、それも好機。

以前よりも強いことを証明できれば、これが処分を兼ねていようとなかろうと、将来に展望が持てる。

「助けられる気はないってことかしら？」

「中国に尽くすためだけに作られた私達に、その選択肢はないわ……。でも貴女達が来てくれて、正直助かった……」

「お礼に貴女方に戦う理由を差し上げますわ？勝てばこの二つのギアはお返しする上に、海根重の所在もお教えしますわ？」

その一言で、伴の顔つきが豹変する。

「遂に、手がかりに、辿り着いた…。いいわ、きつさと始めましょう?」

「ええ、そうね。…クアドラプル伐剣!!」「クアドラプル伐剣!!」

伐剣、それはシンフォギアの持つ決戦ブースター・イグナイトモジュールの起動コマンド。

魔剣ダインスレイフの呪いを応用して意図的な暴走状態を誘発・制御することで、攻防両面の戦闘力が飛躍的に上昇する。

当然ながら危険な機能でもあるため、三段階のセーフティが存在する。

中国の聖遺物研究施設は、この三段階目までに耐え得る精神状態の開発には成功していた。

クアドラプルは存在しない四段階目、セーフティなしの、装者の意志の力だけによる暴走状態の制御。

かつてこの奇跡的な所業に成功した者は、エクスカリバーに起因する GANG ニールの暴走・破壊衝動に打ち勝った、立花響ただ一人である。

(私はセレナ2…GANG ニールと適合する精神、あるいは魂と言ってもいいかもしれない…の模索のために作られたクローン。

私以外にも…沢山の精神のバリエーションが作られて…クローンに植えつけられて

…でもあの日に至るまで…誰も適合しなかった。

オリジナルの観測記録から作られたセレナーですら…薬品の投与なしでは適合しなかった。

私達は処分されて…新しい異なった精神を持つクローンが作られ続けて…いつかは適合者が現れる計画だった。

あの日…ガングニールの製造を研究していた施設が破壊された日。

唯一シンフォギアを製造できる人物も死んで…計画が完全に白紙に戻って…そして変わった。

多分…完全な装者と…完全な聖遺物…その実験のためだけでも…私は…私達は…暫しの生を許された…嬉しかった。

イグナイトモジュールの起動実験…計画の本筋にはなかったけれども…認められた…嬉しかった。

ああ…私は生きたかったんだ…妹達と…生きたいんだ…だから私は…同胞を殺せた。

殺す殺すこ口すころskoroskorusこ口sukorosu…違う!!生きる!!
この国で生きる!!妹達と生きる!!ずっと生きる!!

それを阻むモノは全て消し去る!!自由になる!!そのための力を!!!

セレナ3…貴女も…私とは違う貴女だけでも…きつと同じ思いで戦っているのよ

ね?)

(ええ…姉さん…生きたい…皆で…そのために…こんな呪いになんて…負けられない!!
負けてなるものか!!!)

目の前で奇跡を眺めながら、伴もまた秘策を使うべき時だと考えていた。

「勝つわ。重の為にも、アンタ達のためにも。キャロル・マールス・デーインハイムの遺産を使ってね」

魔法少女事変の最終決戦の際、伴はチフオージュ・シャトーの城内に潜入していた。

そこで幾ばくかの錬金術の知識、オートスコアラーの設計図、そしてキャロルの思い出のインストール装置。

通常ではあり得ない量の記憶の記録ができるよう肉体を改造したキャロルとは違い、伴は想い出の全てはインストールできなかった。

だが決戦時にただの一回、決戦仕様になるだけの、焼却用の記憶は確保していた。

皆神山では、重に辿り着けるかが分からなかったため、これの使用を控え、絶唱に頼ったのだが、今回は違う。

セレナ達に勝って、そのまま重の元まで飛んでいく。

今までは計算ずくめだったが、それがことごとく失敗とあれば、このくらいシンプルの方がいいかもしれない、と伴はふと思った。

「エクス、ドライブ!!!」

第8話 撃槍

「クアドラプル伐剣!!」

そう唱えたシウルシャガナを纏うセレナ2と、イガリマを纏うセレナ3は、純黒のギアを全身に纏った。

暴走を制御し得る精神を人工的に手に入れた二人。

だがそれだけではなく、シウルシャガナとイガリマという惹かれあう二つの聖遺物、混じり合う二つの歌声が、二人を正気にさせる。

「エクストライブ!!!」

そう唱えたガングニールを纏う伴と、伴のエインヘリヤルたる奏・翼は、姿を一変させる。

エクストライブモードでは、シンフォギアの301, 655, 722種類のロックを自在に解除し、装者が自由自在にカスタマイズが可能となっている。

親友の重の元へ一直線に飛んでいきたいと願った伴は、光の巨翼に包まれ、その手には光の槍を持つ。

威力を大幅に上昇させながらも質量を最大限落とすことで、最速を追及した形態であ

る。

元来、放ったエネルギーがドリル状に渦巻く、破壊力・突貫力に秀でたギアを纏っていた奏は、肩部に嵐を放つ一対の巨槍を装着する。

腰部には自立飛行するシールド装置を複数装備し、遠距離攻撃に特化した形態をとる。

一方、天羽々斬による斬撃を得意としていた翼は、両腕・両脚に槍を直接装着する近距離攻撃に特化した形態を取る。

腰部や槍にはスラスターを持ち、伴ほどではないが高速での移動や斬撃も可能である。

巨大なドームの中に、五つの奇跡が舞い降りる。

遅れてセレナ4達ギアを纏うクローン達がドームに入ってくるが、これから起こる戦いが自分達の運命を決めるものと直感で察する。

伐剣のような、暴走を誘発する仕組みをギアに導入することで、自分達にも新たな希望が開かれるのではないかと。

ギアを持たないクローン達の元を集い、ただ攻撃の余波への対応だけと心に決める。

まず動いたのはセレナ2。セレナ2は無数の円鋸を投擲する。その数数百、伴達の視界は完全に奪われる。

それらを吹き飛ばすべく、奏はセレナ2達がいた方向へ、肩部の槍より破壊の嵐を放つ。

空いた空間から翼が飛行し突撃するが、円鋸の裏から現れたセレナ3が鎌を振るう。

だが、翼は匳、別方向、奏が円鋸を処理していない部分から器用に旋回し、接近した伴がセレナ3へ槍を振り下ろす。

セレナ3は肩からワイヤーを飛ばし、近くの円鋸を伝って緊急回避する。

伴と翼は急旋回し、セレナ3を追う。奏は周りの円鋸を利用されないよう、広域に嵐を撒き散らす。

その奏の背後に回った円鋸が突如形を変え、セレナ2が現れる。

奏はシールドでその斬撃を防ごうとするが、鋸刃はシールドに食い込み、切り裂こうとする。

セレナ2は完全に奏の槍砲の間合いに侵入するが、奏は壁に向かって嵐を打つことで、その反動で伴達と合流する。

その際に幾つかの円鋸に触れ、体が抉れるが、伴は光の巨翼で奏と翼を覆い隠し、覆いが取れると傷は全て癒えてきた。

元々奏と翼の体は生身ではなく魂の入った聖遺物であるため、多少の攻撃では倒すことはできない。

セレナ3は周囲の円鋸全てにワイヤーを張り、三人の居場所に再投擲する。さらにセレナ2も再び円鋸を無数に放ち、曲線軌道を描かせることによつて逃げ道を巧妙に封じる。

奏は上方に向かって砲撃を加え、逃げ場を確保するが、足元から忍び寄つたワイヤーによつて絡め取られ、一人脱出の期を逃す。

ワイヤーに引きずられ、鎌を構えるセレナ3の元へと引きずり寄せられる。

奏の砲撃は、砲槍の内側に入られることで対象に当てることができなくなる欠点をセレナ達は先程の攻撃で見破っていた。

また今回は仰向けのまま引き寄せたことで、地面を利用した脱出は不可能。

鋸よりも鋭利な鎌は、シールドを簡単に打ち破り、奏に切りかかる。

「魂を削り取れば、お前は復活できない……」

これで2対2になる、そう確信して鎌を振り下ろすが、その鎌が槍によつて塞がれる。どこから……？

「暫し眠るがよい」

そこにいたのは天羽奏ではなく、風鳴翼だった。

奏と翼は聖遺物に魂を入れた存在、つまり簡単に入れ替えることが可能である。

伴は巨翼で二人を覆つた時に二つの魂を入れ替え、セレナ達を嵌めたのである。

腕槍で鎌を受け止めた翼は槍から電撃を放ち、その電撃は鎌を伝ってセレナ3へと流れ込む。

セレナ3は全身が麻痺し、動けなくなる。

「残るはアンタだけよ」

翼の姿を解いた奏が全力の砲撃で全方位の円鋸を破壊し、伴が高速で肉薄する。

セレナ2の武装は全て光槍で破壊され、その喉元に槍が突き立てられる。

「…私達の負け、ですわね」

「約束よ、重の居所を吐きなさい」

「沖繩の、米軍基地よ」

その瞬間、施設が地面から爆発した。

遠方よりカメラを通して一部始終を覗いていたクローン計画の責任者である李將軍

が、基地の自爆スイッチに手をかけたのだった。

既に実験は終了し、時間稼ぎも終わった。セレナ2以下は不要となった。

突然の爆発。

一瞬意識を失った翼は目を覚ましたが、視界は先程までとは違っていた。

S. O. N. G. の潜水艦の、医務室の天井…？

「夢、だったのだろうか…」

だがすぐに、先程までの戦闘は夢ではなかったと実感した。

手にはシウルシヤガナとイガリマのペンダントがあり、そして…。

「おはよう、剣ちゃん？」

ベッドの傍で、ソードブレイカーで器用にリンゴを剥くファラの姿があった。

翼は急ぎ、司令室へ向かう。

「指令!!急ぎ沖繩へ!!」

「すでに向かっている!!沖繩米軍からの救援要請だ、何者かに襲撃されている、とな」

決戦が、始まる。

第9話 撃ちてし止まぬ奇跡のもとに

「何なんだ、これは…!？」

沖繩上空で戦闘機を操る米軍パイロットは驚愕していた。

謎の襲撃者、白銀の装甲と翼、そして黄金の槍を携えた少女。

たった一人の少女によって、今、米軍沖繩基地は危機に瀕していた。

その少女の反応は、沖繩米軍基地西方に突如として現れた。

始めに強力な何かが放たれ、基地の端部は大きくえぐられた。

その時点でスクランブルがかかり、航空部隊は少女の迎撃を開始した。

だが何らかの力で通信網とレーダーがほぼ無効化され、混乱を極めるうちに次々と戦闘機は撃墜されていく。

幸いなことに、敵はコクピットは狙わないらしく、死者は出ていないようだが…。

「舐めやがって!」

戦闘機のバルカンが火を噴く。さすがに人間の反応速度では対処できまい。

そう信じるが、バルカンは不思議な力に弾かれ、少女には当たらない。

次の瞬間、敵が槍から放つビームによって戦闘機の片翼が吹き飛ぶ。

さらに、わずかに機能していたレーダーが絶望的な情報を伝える。

「ミサイル…俺達を狙って？」

レーダーがほぼ機能しない現状で、基地からの援護射撃は考えにくい。

すなわち敵増援…そう考え、パイロットはゾツとする。

しかもミサイルは方角は東側から、つまり感知させられぬまま包囲されていたことになる。

だが希望の声が聞こえた。

「生きるのを諦めないで！」

セレナーは中国の研究施設で他のクローン達の手を借り、エクストライブモードへと変身した。

中国軍からセレナーに下された命令は、米軍沖縄基地の襲撃。

中国は既に国連に、セレナー達がテロリストであると通達している。

逆に言えば、テロリストが何をして、例えば米軍と戦闘しても、中国は痛くも痒くもない。

セレナ達の性能実験の一つ、対兵器戦実験のデータが採取できる上に、仮想敵国の戦力を低減させる絶好の状況ではない。

最もテロリスト認定に関してはセレナーには伝えられず、中国の施設でもう一つの実

験が行われていることを彼女は知り得ない。

(早く帰って妹達と会いたいな…)

セレナーはそんな思いを胸に、アガートラームの力を行使する。

ベクトル操作の力を最大限に生かし、通信網とリーダーを攪乱する。

敵の数が多すぎるため、全てを無効化することは叶わないが、敵を分断するには十分である。

同時に自身の周囲に特殊なベクトル空間を広域に形成し、敵からの攻撃をすべて捻じ曲げる。

そしてその手にはガングニールの槍がある。

今回の作戦に当たり、中国軍より支給された武器、驚くべきことにそれは既に起動状態であった。

完全聖遺物、なのだろうか？しかしそれは、ありえないはずだが？

「響ちゃん・クリスちゃんを乗せたミサイル、戦闘区域に到着しました！」

S. O. N. G. 潜水艦の司令室にて、藤堯朔也が叫ぶ。

「続けて翼さん・調ちゃん・切歌ちゃんを乗せたミサイル、発射します！」

マリアは発射されていくミサイルをただ見守ることしかできない。

「セレナーがくれたギアの解析はまだなの!？」

横浜でセレナー、偽りの妹から受け取ったシンフォギアの聖遺物は判明していない。皆神山でのように、立花響のギアをシェアする方法もあるが、マリアはセレナーを信じたかと思いい、出撃を見送る。

「解析の進行度はまだ40%です！」

友里あおいが焦りの滲んだ声で答える。

「お願い、間に合って…」

「S2CA・ツインプレイク typeアロー！」

沖繩米軍基地への襲撃者、セレナーのエクストライブに対処するために、すでに伐剣と絶唱は済ませてある。即座にコンビネーション技へと移行する。

S2CA・ツインプレイク typeアローとは即ち遠距離攻撃に特化したコンビネーション技である。響が二人の莫大なエネルギーを束ねて虹色に輝く矢を作り、クリスと共に弓を引く。

そして放つ。エネルギーの塊がベクトルの領域を物ともせず進んでいく。

だがセレナーが槍から放つビームは弓を迎え撃ち、そして消滅させた。

消滅させてなお有り余る槍の力はさらに、基地に二つ目の穴を穿つのであった。

「強い!?!」

「でも引けない!?!」

セレナーが迎撃に集中した瞬間、米軍通信網・レーダーの機能が回復した。

戦闘機が、基地が、響達を迎撃支援してくれている。

響は再び矢の形成にかかる。

「皆が来るまで、凌ぎ切る!!」

「『S2CA・トライバースト typeブレード!』」

幾ばくかの交錯の後、遂に時は来た。

天羽々斬を纏う翼は胸のガングニール・繋ぐ力を利用し、調・切歌の斬属性を一つに束ねる。そして虹色の剣が振り下ろされる。

ベクトルの領域を切り裂く剣は槍によって阻止されるが、そこに虹色の矢が駆ける。セレナーに直撃し、セレナーは後方へと弾き飛ばされる。

「やったか?」

期待を込めて翼は飛ばされた先を見やるが、そこから強力なビームが放たれる。

「先輩!!」

クリスがりフレクターを展開し、ビームを弾こうとするが、その威力にリフレクターが爆散する。

今度は結果的に響達全員が米軍沖縄基地まで吹き飛ばされてしまった。

「あの槍の力、まるで完全聖遺物…」

地面に蹲りながら、響は口にする。威力比べでは歯が立たない。

追撃の如く、更なるビームが放たれる。

「そんな…」「やばいDeathよ！」

だがそのビームはいずこからか放たれた竜巻に軌道を逸らされる。

「間一髪、だな」

「あんた達、ぼさつとしてるんじゃないよ!!」

「奏…伴…、よかつた生きていた…」

翼が見上げた空には、エクストライブ・ガングニールを纏う、二人の少女が佇んでいた。

第10話 君でいられなくなるキミに

「夢の軌跡は」「ここで終わりじゃないよ」

「進もう」「進もう」「先へ」「先へ」

「命尽きようとも」「天に還ろうとも」

地羽伴と天羽奏は歌い始める。

目の前にいる敵には、セレナーには、全てをぶつける、ぶつければならない。

相手はエクストライブモード、しかも、完全聖遺物状態のガングニールを携えているのだから。

「そう……そこにいたのね……重……」

かつてドイツで発見されたガングニールは、穂先の一欠片だけの状態であった。

残る部分がほぼ完全な状態で発掘された、という可能性はあるものの、それを中国軍が掌握しているというのは想像に難い。

そうであれば、伴と海根重が誘拐されたあの日、立花響から除去されたガングニールの欠片を中国軍は回収する必要はなかったはずだ。

そして研究所でのガングニールのギア量産計画も、重に植えつけ培養するという形で

はなかっただろう。

「そのガングニールは重の成れの果て…ガングニールに侵されて…そんな姿になってしまったのね…」

何よりも伴は、その槍の鼓動から、とても懐かしい、重の鼓動、温もりの波動を感じ取っていた。

待ち望んだ再開は、夢見た形とは違っており、重の頬を涙が伝う。

「諦めるな…まだ海根重の魂はそこにある…だから私は、ここにいます!!」

奏が伴を叱責する。

あの研究所で処分されそうになった伴が、ガングニールの絶唱によって召喚させたエインヘリヤルの奏。

本当は重を召喚するつもりであったが、魂がヴァルハラにない重は召喚できず、名前の親和性によって偶然奏が呼び出されたのである。

ヴァルハラは戦士の魂が集う場所とされているため、単に重が戦士として認められない可能性もあつたが…。

今日まで幾度となく召喚に失敗してきた伴は、この世界のどこかで必ず重は生きていると、そう願ひ、信じ続けていた。

そして奏は、そんな伴の駒、あるいは騎士として、今日まで共に歩み続けてきたので

ある。

かつては時折霊体となり風鳴翼の様子も伺いに行っていたが、新しい仲間と歩み始めた翼を見、寂しく思いつつも安心し、別れを告げた。

そして今、奏は新たな別れを迎えようとしている。

「伴、私を完成させろ!!」

伴と奏もまたガングニールのエクストライブ状態ではあるが、完全聖遺物に及ぶだけの力はない。

そしてまた、セレナーを倒すだけでなく、この非人道的な実験自体を止めたいと願っている。

そのために、伴はあの研究所で得た陰陽術の知識を聖遺物と掛け合わせ、新たな力を得ようとしている。

「ありがとう 君も、海も、土も、空も、全部」

「さようなら 君と、波と、草と、風と、全部」

セレナーは、歌う二人をじつと見つめていた。

セレナシリーズが最強である、最強の兵器を作り出す実験は成功であると示すには、相応の相手が必要である。

そのためにアガートラムのベクトルの力を密かに走らせ、二人の力を分析しようと

するが…計測できない。

本能は、これ以上は危険だ、攻撃すべきだと告げているが、待つ。

その時、空が割れ、中から巨人が現れた。

「…来たわね、レイアの妹…私の大樹！」

空中から現れたのは、レイアの妹と称されるオートスコアラの成り損ないである。

伴が4体のオートスコアラと共に復活させた錬金術の兵器。

他の4体同様、伴の目的に沿った形で再設計されている。

「私も準備OKだ、フォニックゲインが漲ってきたぜ！」

奏が告げる。今までの路上ライブ等を含め、奏は常にフォニックゲインを貯蓄し続けていた。

それは奏を、聖遺物によって作られた体を持つ聖遺物同位体である奏を完成させるため。

伴は奏の胸の真ん中に手を当て、そして静かに引き抜いた。

奏の体から抜け出てきたそれは槍…完成された槍…レプリカ・ガングニール！

「今まで、付き合わせて悪かったわね、奏。…感謝してるわ」

「…ああ、託した」

役目を終えた奏は静かに海へと落下していく。

その目に光はないが、最後まで伴に向けられていた。

「エクストライブとエクストライブ。レプリカとレプリカ。これで、私と同じになった
ということかしら？」

セレナーは問いかける。

ギアと槍は同じ、だが装者の素体としてはセレナーが上だという自負はある。

だが不確定要素として伴には陰陽術がある、レイアの妹もある。

「装者の素体として私は劣っているわ……このままでは勝てない。だから、こうするのよ
!!」

伴が突然、レイアの妹に首を掴まれる。

そしてその状態で伴は、自らに槍を向け、そして自らを、レイアの妹ごと、突き刺した。

「降りてこい!!オーデイン!!」

かつてオーデインは、ユグドラシルの木で首を吊り、ガングニールに突き刺し、神に身を捧げ、神の力を得たとされている。

これはその儀式の再現、例えば自分を失ってでも、全てを終わらせる覚悟がある。

今度こそセレナーは直感に従い、槍から膨大なエネルギーを収束してを放つ。

だが届く前に霧散してしまう。

「私の勝ちよ、セレナー。私はもうすぐオーデインに体に乗っ取られる。でもその前に、この世界に神の力で呪いをかけるわ。」

聖遺物を兵器にするための非人道的なくそみたいな実験が、二度と行われなくなる呪いよ!!」

…何かが、世界に浸透した。

セレナーが持つ槍が、人に変わる。重の姿に戻る。どこからともなく現れたフアラが重を回収し、離脱した。

世界の幾つかの場所で、稲妻が落ちた。聖遺物の非人道的な実験施設が神の雷で破壊されていく。

「これは、何? 研究所のみんなは無事なの!？」

セレナーは混乱する。中国に残してきた皆にこの呪いの災禍が降りかかっていなければ良いのだが…。

だがそんな希望は、エアキャリアからの李將軍の通信に打ち砕かれる。

『神の呪いとやらで幾つかの施設がやられ、クローン達が犠牲になった。だがまだ無事な施設もあるらしい…』

もちろん李將軍が施設を放棄して自爆スイッチを押したため、内容は出鱈目である。

本国からの報告はまだ何もない。

だが、これで李將軍の真の目的は達せられる。將軍は密かにほくそ笑んだ。

「…妹達はやらせない！貴女が命をかけるなら…私も命をかけましょう！」

セレナーは、最強の装者になる覚悟を決めた。

本当は昔から気が付いていた、それは実は睡眠学習で植えつけられていたのだが、妹達といたいがために気づかないふりをしていた。

だがその妹達が危機である、迷っている猶予はない。

「ベクトルの力よ！体内の刻印から遡り、リインカーネーションを！セレナ・カデンツァ
ヴナ・イヴの魂をこの体に！」

最強の装者になるための最後のパーツ、セレナ・カデンツァヴナ・イヴの魂。

中国軍の最終的な計画とは、その魂の複製をクローンに植えつけ量産したギアを纏わせることで最強の軍隊を作り上げる計画。

即座にエアキャリアに魂の情報が転送されていく。

セレナーは、その魂に対する命令ベクトルを体内に残し、そして魂をかき消された。

「…私は、…セレナ・カデンツァヴナ・イヴ、…世界が…眩しい」

セレナーは目を擦る。そして目の前の敵に、アガートラムの剣を向けた。そうしろと、体が言うがままに。

第11話 シンフォギア

S. O. N. G. 潜水艦内の司令部では、怒号が響いていた。

「空間にゆがみが発生しています！」

「未確認のエネルギーです！」

伴による神の呪い、そして、別次元からのセレナの降臨。この二つの事象によって、沖縄近海の空間のエネルギーが異常に高まる。

「中国の方向から潜水艦らしき艦影を捕捉」

「敵か!？」

「逃げ遅れた米軍艦の可能性もあります。ノイズも酷くあまり期待できませんが、通信を試みます！」

「別方向より強力なフォニックゲイン：新たなアウフバツヘン波形を確認。これは…」

「神獣鏡…だと!! 未来君か? それとも新手か!？」

「わかりません!!」

「不明艦との回線繋がりました! 自衛隊です! 回線開きます!」

目まぐるしく変わる状況の中、必死に何ができるかを考えるマリア。そこに、エルフ

ナインが現れる。

「セレナーさんから得たギアの解析、終わりました。このギアは……」

「…奇跡が起こる、いや、奇跡を起こして見せる！ 出撃します、ミサイルの準備を!!」

マリアはすべきことが見つけた。そしてそれをするための方法も。

「貴女を、倒します!」

セレナは剣を構える。急ぎ倒せと、誰かが頭の中で告げる。何故なのかを考える余裕は与えられない。

儀式中で身動きの取れない伴に対し、セレナは光のベクトルを変換・収束し、光線を放つ。

「そうはさせん!」

「「S2CA・テトラブラスト typeキャノン」」

響・調・切歌がクリスのキャノン砲に力を集中させ、クリスが放った光線がセレナの光線を逸らす。

その間に翼が飛行し伴に接近、説得を試みる。

「馬鹿な真似はやめるんだ、伴! 私は…私はこんな形で解決なんて、伴がいなくなるなんて、認めない!」

「…馬鹿がそつちよ! 今すぐ離れなさい! もう止められないわ!」

伴が槍から片手を放し、翼を突き飛ばす。

「…だからあんたを体に戻したのよ…短い間だったけど、世話になったわね…ありがとう…」

その時、翼の後方、先程まで響達といた場所から、大きな爆音が聞こえる。

目をやると、テトラブラストで時間稼ぎを行っていた響達は倒れ、無傷のセレナだけが立ち残っていた。

今度は先程まで伴がいた場所から爆音が鳴り響く。

もう一度伴に目を戻そうとするが、その前に、強力なエネルギーで吹き飛ばされる。

最後に目の端にちらりと映ったのは、伴ではなく、槍を携えた老人と、爆散したレイアの妹の破片であった。

「妹が…逝ったか…」

レイアは響達とは異なる孤島から、戦闘の様子を伺う。

「重ちゃんは目こそ覚まさないけど、体に異常は見られないわ」
重を上空より回収したフアラが報告を加える。

「いや〜ん、マスターの見た目がオジサマに…マスターまたしても作戦失敗？」

ガリイは冷静に状況を判断する。徐々に伴がオーデインに変わっていつている、と。

「ワタシはいつでもいけるゾ〜、未来」

ミカは両手を伴ニオーデインに常に向けている。ミカの背中には神獣鏡を纏う未来がいた。

「伴さんの残した指示は、伴さんとセレナさんが射線軸に来たら二人纏めて神獣鏡で無力化すること。でももう猶予はない：撃ちます！」

未来は島ごと覆っていた迷彩を解く。

伴は、自身がオーデインに変わった後、オーデインが世界の新たな災禍に変わるリスクを考え、未来をこの島に配置していたのであった。

神獣鏡の、魔を退ける輝く光の奔流で、不完全な状態でオーデインを消滅させるために。場合によっては自身の魂ごと。

「疑似エクストライブ!!」

その叫び声と共に、ミカから大量のフォニックゲインが未来に流れてくる。

大容量・高出力のミカは、奏と共にフォニックゲインをその身に貯蓄していた。

適合係数が非常に低く、単独ではギアを纏えない未来だが、未来とミカ、その名前の親和性を陰陽術に利用して、ギアを纏った。

そして今、エクストライブモードへと突入する。その負荷は全てミカが背負う。

未来の周囲には、無数の円鏡が浮かび、その一つ一つがまるで神経のような糸状のもので繋がれる。

遠くから見た未来の姿は、まるで蝶を纏っているかのようにも見える。

その鏡一つ一つが浄化の光を灯すが、その光を一旦容量が空になったミカに逆流させ、ミカの両の手から収束させて放つ。

「お願い、帰ってきて！ 伴さん!!」

オーデインは避けようとするが、水・風・金の三種の結界が阻む。

直撃したオーデインは、姿を伴に戻す。だがそれは、ほんの一時であった。再び、オーデインの姿へと戻る。

未来もまた、変身が解ける。あくまで一発限りの、疑似的なエクストライブの限界であつた。

そして負荷を全て受け、許容量以上の力を束ねたミカは、崩壊した。

セーフティの機能によってギアが解除された響達は、別の孤島に這いつくばりながら、その光景をただ眺めていた。

「そんな…未来が戦ってるなんて…」

「畜生、神獣鏡でも浄化できねえってのか!?!」

「もうどうすることもできないのか…?」

絶望する響達をよそに、セレナは再び剣を構える。

「セレナ、もうやめるデス!」

「私達が分からないの？ 白い孤児院で一緒だった、調と切歌だよ！」

「調…切歌…懐かしい名前…でも駄目…私の中の何かが、思い出させてくれないの…！」
セレナは混乱する。私は妹のために、アレを滅ぼさねばならない。妹…？ 私が妹だったのではないか…？

「そう…マリア姉さんの…」

そこに一隻の潜水艦が現れる。そこから出てきたのは、自分と同じ顔の…。

「セレナー姉さん？」

「…それとも貴女は、オリジナルの、セレナ・カデンツアヴナ・イヴ？」

「私はセレナ・カデンツアヴナ・イヴよ。…そう、私の中で戦えと告げるのは、セレナーという人なのね？」

「ええ、私達の、ために…」

「でももう大丈夫ですわ！ 私達は無事に、風鳴の潜水艦に、保護されましたもの…」
さらに多くのセレナシリーズが孤島に降り立つ。

「セレナー姉さん、優しくして強いセレナー姉さん、私達はもう、大丈夫だから」

「今まで守ってくれて、ありがとう…」

その瞬間、セレナの中から何かが消えた。セレナは遂に、本当の意味でセレナに戻った。

「調、切歌、久しぶり、大きくなったね。そちらの方々も、傷つけてしまつてごめんなさい」

頭を下げるセレナに、響達は何とか立ち上がり、手を指し延ばす。

「気にしてくれるな」

「あたしらは頑丈が取り柄なんだ」

「一緒に、歌おう!!」

「私達も」「歌うデース」

「私達セレナシリーズも、共に!」

「響! 私も歌うよ!!」

変身が解けた未来も合流した。

「 I e n t r u s t m y s o u l t o y o u 」

「 W e e n t r u s t o u r s o u l t o y o u 」

「 L i g h t t o t h e w o r l d 」

「 L i g h t u p t h e d a r k n e s s 」

斉唱している人数自体は、響・翼・クリスの3人が最初にエクストライブモードになった際のリディアンのの学生数に及ばない。

だがここにいるのは皆、高フォニックゲイナーである。そのフォニックゲインは、当

時の何百倍にも及ぶ。

「コッココ エクス、ドライブ!!!」

「コッココ」

響が、翼が、クリスが、調が、切歌が、未来が、エクストライブモードのシンフォギアを、纏った。

第12話 GB

「てやああああああー！」

エクストライブモードとなった翼が高速で飛翔し、先陣を切る。

オーデインは槍からビームを放ち、翼を迎撃するが、

「させないー！」

調が放った無数の鋸がビームを遮り、ビームに当たり、減衰させる。

「せいっー！」

その間に接近した翼が両の手の剣で切りかかるが、槍でいなされ蹴りで吹き飛ばされる。

「そっちは囷だー！」

すると上空に突如、クリスが現れる。その周囲には月の欠片を破壊した時のように、無数の巨大なミサイルが展開している。

クリスはプロテクターで光そのものを屈折させてステルス状態となる傍らで、大量のミサイルを発生させながら上空へ移動していたのであった。

オーデインはSTAR DUST∞FOTONを発生させて迎撃にあたるが、

「それも囿だ！」

一発、クリスが発生させたものではないミサイルが、S・O・N・Gの潜水艦から放たれたミサイルが、別方向の宇宙から飛来する。

中から現れたのは白銀のギアを纏ったマリア……だがそのギアはアガートラームではない。

「喰らえ、ネフィリム！」

ガングニール量産計画において、ガングニールが制御不能になる可能性を考慮して保険として中国が作成したギア。

神獣鏡ほどではないが、神獣鏡と同じく世界に複数ある聖遺物であり、中国でもいくつかの発見されていた。

神獣鏡とは違い非常に強力なギアであるため、保険としてはネフィリムが充てられることになっていた。

高フォニックゲイナー達の歌の奇跡で纏っているところはあるが、かつてセレナが命を賭して封印したソレを纏うということは、今のマリアはかつてのセレナを越えたとも言えるかもしれない。

マリアは巨人のアームドギアを形成し、その巨人がオーデインから何かを食べた。

「今度こそ消えて！」

オーデインが上空に気を取られている隙に、今度は地上から浄化の光がオーデインを射す。

ミカの壊れた部分を他のオートスコアラのパーツで補い、さらにオートスコアラ同士を連結し、未来の全力を凝縮した一撃を放つ。

オーデインに直撃すると同時にオートスコアラ達は爆散するが、確実にオーデインから何かが削れた。

「削るー」

さらに別方向から鋸の援護射撃を受けながら切歌が接近する。

魂を削り取る鎌で、オーデインの力だけ削ぎ落とすべく振りかざす。そして削る、削る、削る。

「今デスー・セレナ!!響サン!!」

各々が取れる最善の策でオーデインの力を削いだ。

これが完璧なオーデインであれば不可能であったかもしれないが、響は直感的にオーデイン内に異物、伴の魂がまだそこにあるのを感じていた。

ガングニールの奏者としての共鳴、なのかもしれない。

響は金腕のアームドギアをオーデインの腹部に当てる。

さらにそのギアの上に、セレナが銀腕のアームドギアを重ねる。

「…リインカーネーションを応用して魂の位置を検索…見つけました、伴さん！サルベージします!!」

「セレナさんがアガートラムで導いた魂を！私が掴んで離さない!!」

『グオオオオオオオオオオオオオオオオ』

断末魔を上げるオーディン。STARBUST∞FOTONを自身に向けて全方位から発生させる。

絶望的な数の槍ではあるが、だがそれは、逆に奏者達を勇気づけた。

「オーディンは焦っている！今、伴の魂が体内から失われれば、降霊の儀式は成立しないのだからな！」

オーディン自身が先史文明期この儀式を行った際には9日9夜を費やしたと言われている。

だからこそそ伴はその間に世界に神の力の一部で呪いをかけ、かつ降霊前に神獣鏡で浄化するという作戦を立案したのだ。

もつとも本来のその作戦は、例の如く失敗に終わっているのだが。

だが今は、展開されている槍は何かしなくてはならない。

そこに新たな援護がやってきた。

「伴!!返ってきて!!」

海根重、ガングニール奏者。

聖詠で翼の体内のガングニールを強制的に回収し、その身に纏う荒業を持って、戦場に現れた。

顔は伴の最後に会った時のままで幼いが、その髪は身長の数倍は長く、年月を感じさせる。

重はその手を、ガングニールを持つオーデインの手に添える。

元々ガングニール装者の中では群を抜いて適合率の高い重、一度はもう一本のガングニールのレプリカになってしまった重。

そんな重だからこそ、ガングニールと共鳴し、オーデインの攻撃を、完全でないにしても抑えることができる。

「伴！」

「伴さん！」

「おめえ！」

「地羽伴！」

「伴先輩！」

皆が呼びかける。その声に呼応して…。

「うっさいわね…馬鹿野郎共…」

オーデインの体内から伴の魂が抜き取られる。
そしてオーデインは、伴の肉体ごと消滅した。

第13話 わたしの進む道

翌日、風鳴邸執務室。

そこには風鳴八紘と弦十郎、そして響達奏者6人がいた。

「教えて下さいお父様、お父様はなぜセレナシリーズと共に沖繩に現れたのですか？」
翼が問い質す。

「たまたまだ。たまたま私個人が潜水艦を購入したので、ちよつと休暇を取って近海で試運転していただけだ」

「というのが日本政府の公式見解だそうだ。まあ見解と言っても、誰にも察知されていなかったもので、問い合わせはないがな」

八紘と弦十郎が先に建前を答える。

「しかし沖繩には中国軍のエアキャリアがまだ身を潜めていたのでは？」

「その件だが、中国に戻る途中で超自然災害級の落雷によって爆散したところを自衛隊が捉えた。伴君の魂の救出後だ」

それはつまり、オーデイン消滅後も世界には呪いが健在であり、何らかの実験をしようとした李將軍は自滅したということである。

「そうですか。それで真実は？」

「地羽伴から事前に協力要請があった。セレナシリーズを日本政府が保護してほしいとな」

「とはいえ自衛隊を派遣して発見された場合国際問題になる。だから八紘の兄貴は私艇を準備したらしい」

「しかしお父様は公人です、そのような行為は軽率すぎるではありませんか？」

「まあな」

だが八紘には危険を冒してでも得たいものがあつた。そして得た。

「セレナシリーズには海根重と共に筑波できちんとした治療と教育を行う。その上で、中国に還りたいというなら還すさ」

セレナシリーズは戦闘要員として急速な成長と偏った知識しか与えられていない。

一般的な教育を施し、普通の人間として暮らせるようになってから、自分達の意志で未来を決めさせる、それも伴と八紘が交わした約束である。

「当たり前だけど…伴さんや奏さんに、もう会えないんですね…」

響はしみじみと、口を開いた。

「セレナも、ね…」

マリアも口を開く。戦闘の後、セレナはセレナーの魂を再び肉体に戻し、消えて行っ

た。優しいセレナ：望めば共に生きることができたのに。

「さあ時間だ、帰ってくれ。次の客人がやってくるのでな」

八紘に急かされるように、響達は部屋を後にした。

「こうして直接話すのは初めてね、風鳴八紘」

新たな来客が八紘に語りかける。来客は全部で4人。声を発したのはその内の、目つきが悪い短髪の少女である。

「ああ。では約束通り、地羽伴、君には特異災害対策機動部二課に所属してもらおう」
「いいわ」

地羽伴、魂だけの存在となり、ヴァルハラに戻った彼女は、海根重のエインヘリヤルによって召喚される形で地上へと舞い戻ってきた少女。

彼女が特異災害対策機動部二課に所属するというのが、セレナシリーズを救援する際の条件であった。

「風鳴八紘内閣情報官！私、天羽奏は特異災害対策機動部二課への復帰を希望します！」
「本日付での復帰を許可しよう」

天使の羽のような髪を持つ少女、天羽奏。彼女もまたエインヘリヤルによって、復活を遂げた一人だ。

「しかしまさか、陰陽術を使えない君にエインヘリヤルが可能だとはな」

「ガングニールとはルーンの刻まれた武器。ソレになったということは、錬金術を習得したと言っても過言ではありません」

今は髪を腰で切りそろえた幼顔の少女、重。ちなみにこの4人の中では唯一普通の人間である。

「私も特異災害対策機動部二課への所属を希望します」

「地羽伴、いいのか？」

「…散々話し合った結果よ。ちつとも聞く耳を持たねーんだから」

そして最後の一人が口を開く。

「私、セレナ・カデンツァ・ヴナ・イヴも、特異災害対策機動部二課への所属を希望します」

セレナはエインヘリヤルではない。だがその原理を模倣し、アガートラムのアームドギアとして自身の肉体を形成し、そこに魂を写した。

「マリア姉さんばかりに戦わせたくないから。でも姉さんには心配もかけたくないから」

それに…セレナは自分の魂の情報がコピーされたのを理解していた。もし悪用されることがあるのならば、自分の手で止めたい。

「二人とも許可しよう」

こうして特異災害対策機動部二課に、秘密裏に新たな戦力が4人も加わることとなっ

た。

これが八紘がリスクよりも優先した成果。日本政府が新たに極秘に保有することになった、シンフォギア装者4名。

「それでは任務を言い渡す」

八紘が4人に向かって告げる。

『聖遺物を兵器にするための非人道的な実験』に対する地羽伴の呪いは、定義が曖昧で完璧とは言えない。

事実、中国軍のエアキャリアは呪いをかけた時点では生存していた。

よつて、他国に潜入し、聖遺物研究を調査。必要があると判断した場合は即刻破壊せよ。私の潜水艦は好きに使ってよい」

「了解!!」

こうして新たな戦いが始まった。

国連S・O・N・Gの一員として活躍する響達。日本の諜報員として活動する伴達。

いつかまた相見える日が来るであろう。